

農林水産大臣賞受賞

若者と協働した地域活性化とコミュニティ再生

受賞者 ^{いじらさとしょくのうすいしんきょうぎかい} 伊自良の里・食と農推進協議会
(^{ふくいし}福井県福井市)

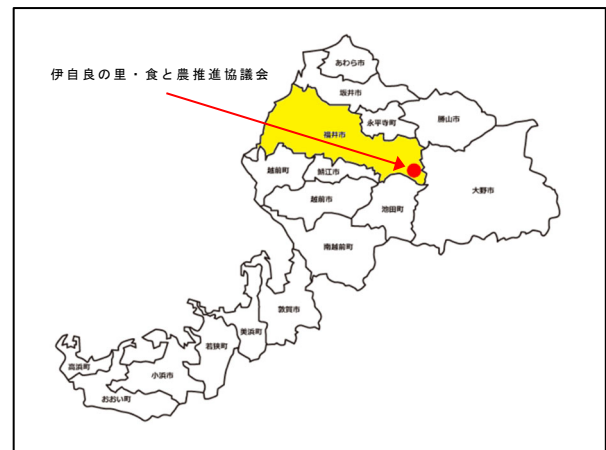
■ 地域の沿革と概要

福井県北部の県庁所在地、県内最大都市の福井市は、平成 18 年 2 月 1 日に、日常生活圏を同じくする旧 ^{みやまちょう}美山町、旧 ^{こしのむら}越廼村、旧 ^{しみずちょう}清水町の 3 町村と合併して新「福井市」が誕生した。

平成 31 年 4 月 1 日には、市民に最も近い基礎自治体として、さらなる市民サービスの向上と人口減少社会や地域間競争に打ち勝つ活力ある地域づくりを実現するため、中核市に移行した。

本市の農業は、^{くずりゅう}九頭竜川、^{あすわ}足羽川、^{ひの}日野川の三大河川流域を中心とした水稲単作を主体とし、農地の約 95% を水田が占めており、水稲＋大麦＋大豆・そばの 2 年 3 作や、水稲にキャベツやネギなどの園芸作物を組み合わせた複合経営が進んでいる。

第 1 図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

福井市上味見地区は、福井市の東端、大野市・池田町との境に位置し、足羽川の源流域にある飯降山の麓に広がる山郷の集落である。主産業は、コシヒカリ等を中心とした水稲栽培が中心である。交通網は、国道の沿線にあり、福井市中心部から車で 40 分程度と比較的近い。

豊かで美しい里山景観が広がり、美肌の湯ともいわれる天然温泉「伊自良

第 1 表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	旧市町村単位の集落等
地区の性格	地縁的な集団等
農 家 率 (内訳)	37.9%
	総世帯数 132戸 総農家数 50戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 12戸 1種兼業農家 5戸 2種兼業農家 14戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 2,617ha 耕地面積 80ha 田 71ha 畑 9ha 耕地率 3.0% 農家一戸当たり耕地面積 1.6ha

温泉」、福井のおいしい水 100 選に選ばれた「野津又^{の つまた}のこしょうずの湧水」など自然の恵みが多くある。

また、豪族・伊自良氏が拠点を構えていたという言い伝えがあり、県の重要文化財に指定された仏像（阿弥陀如来像）が安置されている聖徳太子ゆかりの聖徳寺、樺八幡神社等^{かばはちまん}の文化財、県の無形民俗文化財にも指定され 700 年以上も続けられている「じじくれ祭り」等、文化的にも恵まれている。

さらに、山間地での伝統の焼畑農法で栽培される「河内赤かぶら^{こうちあか}」や寒暖の差がもたらすおいしいお米、品質の良い酒米から造られる地酒等、食にも恵まれた地域である。

2. むらづくりの基本的特徴

（1）むらづくりの動機、背景

旧美山町は、ふるさと創生として平成 8 年 3 月に町営の伊自良温泉を開湯した。

さらに平成 11 年からは福井市街地からシャトルバスを運行し、伊自良まつり（11 月）を開催して、地域内外の交流が始まった。平成 13 年に廃校になった上味見小学校は、生涯学習センターとして利用されていたが、北東アジアこども交流キャンプの開催を契機に N P

O 法人自然体験共学センター（以下「共学センター」という。）が子どもキャンプなど自然体験活動拠点として活用するようになった。そして、活動する地域外の若者の移住・定住に繋がっていった。

また、伊自良温泉の管理運営については、地域住民が「伊自良の里振興協会」（後掲する「伊自良の里・食と農推進協議会」の中核団体）を作り、指定管理（平成 19 年）を受けることとなった。平成 23 年、東日本大震災が発生した際には、「福井からも何か支援ができないか？」と考え、被災した福島の子ども達を地域で受け入れる「福福こどもの笑顔プロジェクト」を開始した。当初は、共学センターが中心となり、子どもキャンプの特別枠として行い、ホームステイや女性グループ「上味みママーズ」による昼食の提供等も含め、夏・冬 1 週間実施した。現在、「福福こどもの笑顔プロジェクト」は、協議会が事業を引き継ぎ、のべ 377 人（令和 3 年 3 月現在）が参加し、福島の子どもとは家族ぐるみの付き合いにまで広がっている。このことがきっかけとなり、地区内で活動する団体間の緩やかな連携が始まり、第 10 回グリーンツーリズム・ネットワーク福井大会の分科会を「地域と N P O との協働による地域づくり」と題して伊自良温泉へ誘致・開催し、受け入れに向けた話し合いを進めることで連帯感が強まり、地域内に都市交流の機運が広がった。このような中で、「伊自良の里振興協会」



写真 1 旧上味見小学校の児童が描いた上味見地区の未来

は、「山郷の恵みのおすそわけ～山郷の物語をつむぐ・山郷の暮らしの旅をする～」をコンセプトとする、「伊自良・いやしの郷づくり構想」（平成 27 年 10 月）を打ち立て、地域活性化へとつなげていった。この構想は、本地域の将来を担う子ども達が描く、地域未来の羅針盤でもある。

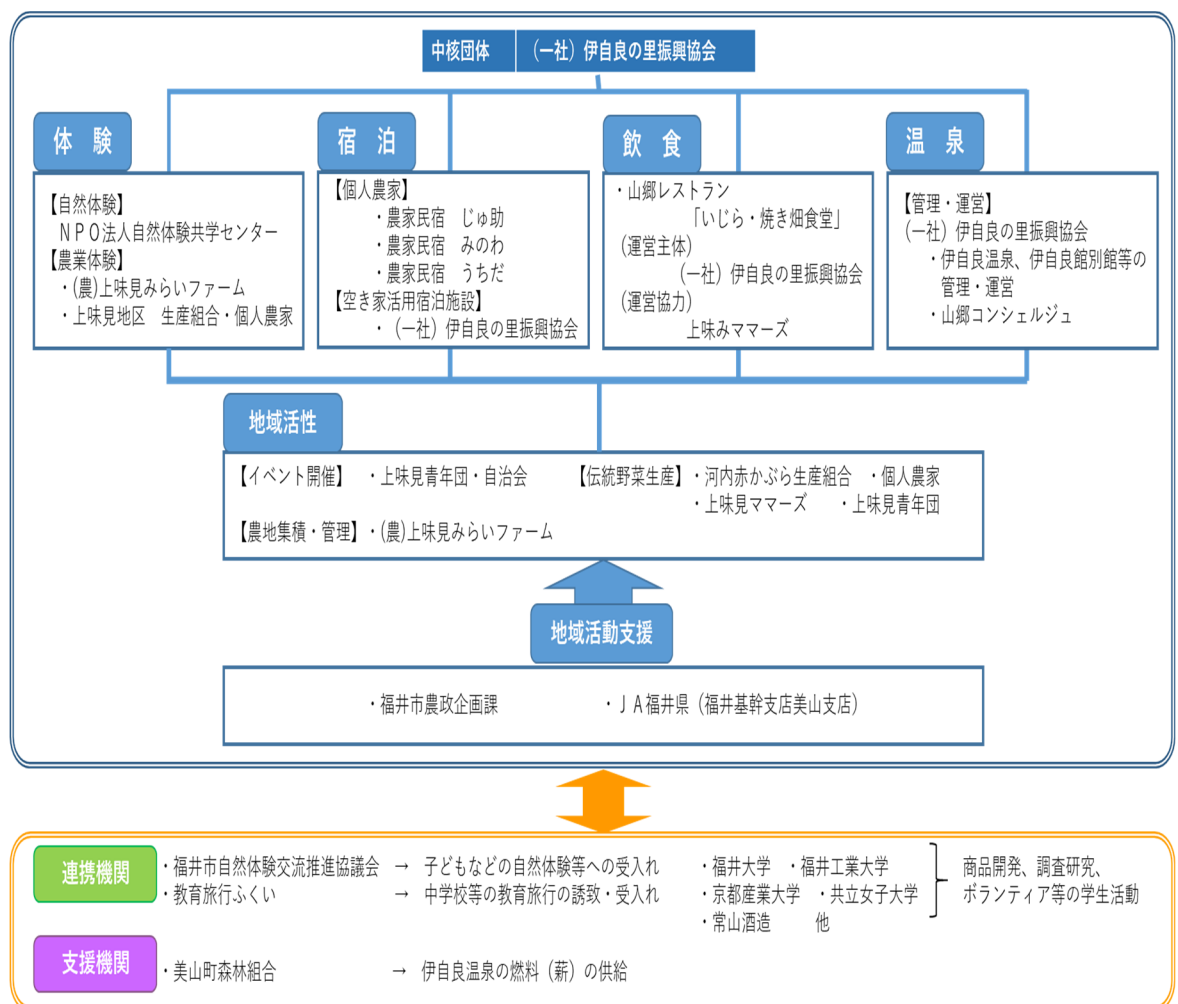
そして、地区内外の連携を強化し、地域住民の交流拠点ともなっている伊自良温泉を核とした取り組みを進めるため、「伊自良の里振興協会」とその連携団体等を構成員とする「伊自良の里・食と農推進協議会」を、平成 28 年 3 月に発足した。

（２）むらづくりの推進体制

本協議会は、これまで上味見地区の地域振興を推し進めてきた「伊自良の里振興協会」を中核として、体験企画の N P O 法人、生産組合、女性グループ、地区外の若者を中心とした上味見青年団等を構成員として設立された。「地域の活性化とコミュニティの再生」を目指して、自然や食を活用し、都市との交流を推進しながら、地域を支える若者の確保を目指して、様々な活動を展開してきた。

第 2 図 むらづくり推進体制図

伊自良の里・食と農推進協議会



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) 農業と林業との連携

平成8年に開湯した伊自良温泉は、当初は加温に重油を利用していたが、平成28年に薪ボイラーを導入した。薪は地域の主産業である林業の間伐材等を利用しており、これにより、適切な育林を促進することにもつながる。

一方、間伐により見通しの良くなった里山林は、鳥獣被害の軽減にも期待されている。

また、雑木林を活用した焼き畑農法による河内赤かぶらの生産のほか、本わさびを間伐を行った林間地において栽培することを目指すなど、山村ならではの農業と林業を上手く組み合わせた地域活動、生産活動を展開している。



写真2 若者による間伐作業

(2) 女性の活躍

地元で生産される農林産物の6次化商品の開発・製造を目的として結成された女性グループの「上味みママーズ」(メンバー5名)。上味見^{かみあじ}青年団と連携して「河内赤かぶら」の生産にも携わるとともに、その加工品を開発・製造・販売している。



写真3 上味みママーズ

また、「福福こどもの笑顔プロジェクト」では、被災した福島の子どもたちの受け入れに際して昼食の提供に携わるなど、交流活動の下支えを行った。

最近では、令和元年に開業した「いじら・やきはた食堂」において、土日昼限定の弁当を提供(郷土料理による豊かな食のおすそわけ)するなど活動の幅を広げており、本地域の交流活動、農林産物の提供・PR等において大きな役割を果たしている。

(3) 外部人材(よそ者)との融合

住民の減少、高齢化等により地域の活力が脆弱化する中、兵庫県出身の若者(当時26歳)が移住・定住し、地域の活性化に向けた活動を開始。やがて地域住民との緩やかな連携が生まれ、「福福こどもの笑顔プロジェクト」や山村交流等を通じて小さな活動が輪を広げ、地域に様々な人材を呼び込むことにつながった。そして、これらのつながりにより地域における様々な活動が維持・継承されている。

具体的には、①地域外の若者を中心に結成された上味見青年団(メ

ンバー約 30 名) が、焼き畑に協力することにより継承されている河内赤かぶらの栽培、②大学生との交流が大きな力となり継続されているじじくれ祭り等の開催、③自治活動に重要な役割を果たす消防団の構成員としての受け入れ等々である。

また、空き家を負の遺産とせず、こうしたよそ者の居住環境や宿泊施設に利用するなど地域資源として有効活用している。

ややもすると閉鎖的になりがちな農山村において、よそ者の知恵と熱意を借りながら、そして連携し、さらには住民（移住者）として受け入れて、様々な活動を行っていることは、本地域の大きな特色である。

2. 農業生産面における特徴

(1) 当該集団等の農林漁業生産、流通面の取組状況

本地区は、日夜の寒暖の差が大きく、また、足羽川の源流域に位置することから水がきれいであり、県内有数の良質米の生産地である。

また、地域農業を支えるべく、上味見青年団等を、焼き畑による伝統野菜「河内赤かぶら」の栽培や休耕田を利用した「本わさび」の生産などの農業ボランティアとして受け入れ、農業の応援活動を企画運営している。このような取組により、本地区内の耕地がしっかりと維持されている。

「本わさび」については、将来的には、間伐を行った林間地において栽培を行うことにより、栽培面積の拡大を目指している。

(2) 当該集団等による生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備等への寄与状況

上味見地区在住の女性達が結成した「上味みママーズ」が、伝統野菜の河内赤かぶらを活用したパウンドケーキや赤かぶらの酢漬け等の加工品を製造し、販売している。パウンドケーキには、純国産鶏の卵である「伊自良たまご」を使用している。赤かぶらの酢漬けは、伝統的なレシピで製造しており、食文化の継承にも貢献している。

また、会員相互でコーディネートしながら伊自良温泉内の直売所や食堂、いじら・やきはた食堂等で地元農林産物等の販売や活用を進めるとともに、イベントでは、地域のPRと販売も行っている。

(3) 当該集団等の活動による構成員等の経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進状況等について

旧美山町時代から取り組んでいる地酒づくりを契機に酒米生産を開始した。令和2年1月、酒米生産に取り組んでいた担い手農家4人が、農事組合法人上味見みらいファームを設立し、福井市内の酒造会社と15.7tの酒米（美山錦、山田錦、五百万石）の栽培契約を結ぶとともに、この酒造会社から酒造りを志す20代の若者を雇用し、地域農業の担い手としても育成することとし（冬期は酒造会社で働く）、地域の農業・農

地を守る活動を始動させた。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 当該集団等の生活・環境整備面の取組状況

ア 自然再生エネルギーの活用

福井工業大学と連携して自転車の車輪を利用したナノ水力発電機を製作し、用水路に設置して発電を行い、街灯等に活用したり、旧貯水槽を活用したピコ水力発電を行った。自然再生エネルギーの活用へのチャレンジは、持続可能な地域社会の実現を目指したSDGsへの取組にもなっている。

また、木材の伐採から加工までを行う「木匠塾^{もくしょうじゅく}」を林家とともに開講し、木にふれ合うことの魅力を発信している。



写真4 大学生と協働した
ピコ水力発電

イ 間伐材の有効利用

平成28年4月、伊自良温泉の加温に使用していた重油ボイラーに加えて、国産の薪ボイラーであるガシファイヤーを導入し、加温を開始した。薪は森林組合等の協力を得て調達を行っており、林業との連携による間伐材の有効利用にも寄与している。

ウ 薪活用の推進

薪ボイラーに引き続き、薪を活用した山村らしい暮らしづくりに向けて、薪オーブンを購入し、子どもの活動やイベントにおいて、ピザづくりを行うなど、薪活用の推進を図っている。今後、薪ストーブを温泉等に導入することを予定している。



写真5 薪オーブンでのピザづくり

エ 植栽による景観整備

地域住民とともに、伊自良温泉周辺の休耕田や上味見川の土手に、ブナ、イチョウ、ハナモモ、西洋アジサイ等の植栽による景観整備を行い、癒しの場づくりを行っている。

今後、ウッドチップ等による遊歩道の整備を行う予定である。

(2) 当該集団等による生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民の交流等への寄与状況

ア 空き家の有効活用

損傷の少ない空き家を無償賃借や譲渡を受け、宿泊施設等での利用を進めて交流活動に活用している。また、農家民宿の開業も支援し、空き家と併せて教育旅行の受け入れの交流活動に活用している。

イ 休耕田の活用

河内赤かぶらの収量を確保するため、伊自良温泉周辺の休耕田を市民農園として開設し、河内赤かぶらの栽培を行うこととしている。さらに、将来的にはオーナー制を行うことも計画している。

ウ 山学連携による取組

大学との連携にも力を入れており、福井工業大学との連携による省水力発電の試作（前述）のほか、福井大学との連携による「K A M I A J I M I O T A K U」（PR用リーフレット）制作、京都産業大学との連携による施設補修や稲刈りなど、山学連携により、調査研究、施設補修、農作業、イベント開催等を行っている。

（３）当該集団等の活動による地域定住促進、女性の社会参画の促進状況について

ア 移住者への空き家のあっせん

移住者への空き家のあっせんも行い、定住化の支援を行っている。この結果、過去 10 年間で 27 人が移住している。移住者は地域産業、社会生活においても活躍しており、頼りになる存在となっている。

イ 地元女性が食堂を切り盛り

令和元年 8 月に旧伊自良資料館別館を活用して、女性グループ「上味みママーズ」が土日昼限定の料理を提供する「いじら・やきはた食堂」をオープンさせた。



写真 6 いじら・やきはた食堂